

はしがき

現在の戸籍の制度では、個人がもつとも自由に変えられないのは姓であろう。

加来という姓は珍しい姓なので、便利なことも不便なことも多い。不便なのは、郵便局や病院などで正しく呼んでくれない事が多く、カライさんとかカクルさんとかカキさんとかいう呼び名にも注意しておかなければならないといったことであり、便利なのは初対面の人とは話のきっかけとして姓の話題が使えることである。賀来さんの場合も同様であると思う。

しかし、賀来または加来を名乗る人はかなり多く、以前、東京都の電話帳でしらべたら百人を超えていた。また、最近では賀来ちか子という女優さんが現れたのでやや有名になった。

わたくしは、この加来という姓の由来について、むかしから知りたかったが、なかなか調べることがなく最近までよく知らなかった。今年、わたくしも六十才という人生の節目を迎えるので、この際、いろいろと調べてみようと思いついた。その結果まとまったのがこの小書である。

未だ、地名である「賀来」の由来がわからないのが残念であるが、昔の賀来関係の方々や最近の学者先生がたが書き物を残してくれていたので、この姓の歴史のあらましは把握できたと思う。関係者とくに貴重な資料を送っていたいただいた町田市の緒方駿朗氏に深く感謝したい。

掲載した写真はわたくしが直接撮影したもので平成二年から四年の状況である。まだまだ、調べ足りないことも多いので諸兄の御教示をお願いしたい。

平成四年十月

加来 利一

目次

- 一 賀来（加来）氏の起源
 - 二 賀来（加来）氏の祖
 - 三 豊後大神氏の活躍
 - 四 豊後賀来本家のものがたり
 - 五 各地の賀来（加来）氏のものごと
 - 六 大神氏のものごと
 - 七 推理「神代時代」の大神氏
- 附録 大神姓各氏の系図の抄録

加来 利一

1933年 福岡県生まれ
九州大学工学部卒
労働省、環境庁に勤務
建設業労働災害防止協会 専務理事
住所 千葉県市原市椎の木台1-24-5
電話 0436-66-3808
FAX 0436-66-0233

賀来（加来）ものがたり

一 賀来（加来）氏の起源

大分市街の南東約五キロのところ久大本線の賀来の駅がある。現在は大分市に属し賀来町であるが、十二・十三世紀頃は、大分郡賀来荘とよばれ、豊後国田帳（建久八年、1197年）によると由原（ユズハラ）八幡宮の御神領で、領家は一条左大将（家経）室家であった。

ここが全国に散らばっている賀来（加来）氏の発祥の地である。地名の由来はわからないが、治承三年（1179年）佐伯三郎惟家なる人物が由原領賀来荘の下司職に任命され、その子孫が惟家→惟頼→惟綱→惟永（願蓮）とこれをうけつぎ、貞応三年（1224年）惟綱が地頭職に任命され（承久の乱の恩賞と思われる）、その子惟永が相続し、これが賀来氏となったという記述が由原八幡宮文書（同宮大宮司平経妙申状案（訴状）（正応二年、1289年））にある。

現存する各家の系図では、賀来氏の始祖として「惟
参考

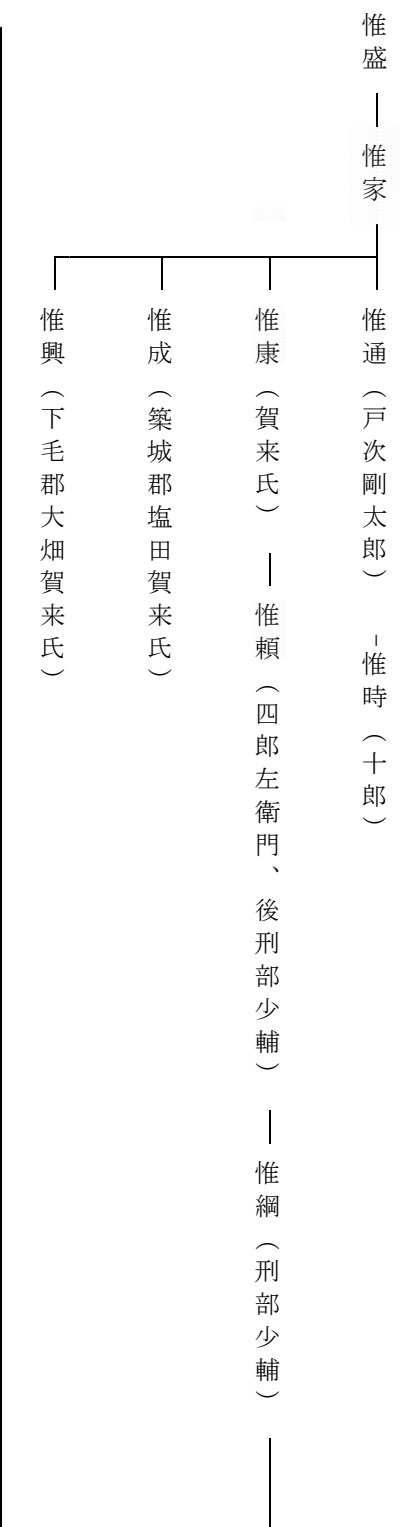
◎ 由原八幡宮（ユズハラハチマンガウ）

大分市ゆず原にあり、天長四年（827年）に延暦寺の金亀和尚が宇佐八幡宮に参籠したさいにお告げを受け、承和三年（836年）に豊後国司大江宇久が宇佐八幡の分霊をまつたのに始まるとされている。祭神は、仲哀、応神の両天皇と神功皇后で、平安時代には多くの荘園をもっていた。

◎ 賀来神社

大分市賀来にあり、武内宿禰命（タケノウチノスクネ）を祭神としている。由原八幡宮と特別の関係にあり、祭神が年間十日を除いて、由原八幡宮に出仕するとされている。卯酉の神事と賀来の市が有名である。

◎ 大神姓豊後賀来氏系図抄（京都 賀来氏）



康」なる人物が記されているものが多い。惟康とこの文書の惟家との関係については、親子、兄弟、あるいは同一人物とする各説がある。惟康または惟家が佐伯氏の祖ともなっている系図もある。

惟康の子のうち、惟頼が豊後の賀来氏を継ぎ、惟康の弟の惟興が豊前下毛郡大畑の城主となり、以後、大畑村を加来村と称した。これが、中津市南方の加来の地名の起りで、惟興の末が豊前大畑の加来氏である、また、他の子の惟成が築城郡塩田の賀来氏の祖である。賀来と加来は、荘園の名称としては賀来が用いられようであるが、氏名の場合は古くから混用されてきたようで、あまり区別されていない。

大分市の賀来には、賀来神社があり、賀来神社の裏手には、現在も賀来氏の館跡とされる土地が残っている。記念の石碑が建立されている。

◎ 大神姓植田氏系図抄（筑後山門郡 太田吉蔵氏）

祖母嶽大明神（高智保大権現）

— 惟基

高智保

惟季（阿南）

季定（植田）

基平（大野）

惟盛（緒方）

惟衡

— 惟茂 — 惟隆（臼井）

— 惟栄（緒方、惟義）

— 惟憲（佐賀）

— 女（日田）

惟家

— 惟澄（戸次）

— 惟康（佐伯）

惟朝

— 惟直 — 惟久

惟定（堅田）

惟頼（賀来）

— 惟綱 — 惟永

るのが荘園としての地名の初見である。

賀来の地は、大分川とその支流の賀来川流域に位置しているが、この一帯は筑後川流域文化の影響をうけた千代丸古墳や古代の条里遺構が存在するなど早くから開発されていた。また、豊後一の宮とも呼ばれた由原八幡宮の直轄荘として栄えていた。

荘園としての賀来荘は、豊後国大分郡のうち大分川と賀来川の流域を中心としていたが、一時は大分港の南部生石一帯も含んでおり、現在の太田市大字賀来、中尾、宮苑、高崎、小野鶴、八幡、生石等にまたがっていたと思われる。

治承元年（1177年）八月十八日の大春日立並下文に、「下 賀来御荘神官百姓等所」として記されている。

「弘安凶田帳」によると、賀来荘は本荘二百町と平丸名三十町（竹田津本五十町）とあり、本荘の領家は一条前左大将家室家（三浦本は後室）、地頭は賀来五郎惟永（法名頼連、三浦本は願蓮、平林本は顕蓮、竹田津本は顕連）とある。これは、賀来荘は十二世紀前半までは、由原宮宮司の荘務の地であったが、鳥羽院の時大宮司大神広房が勅勘を蒙り、左大臣家（時房）が領家職となったためである。

惟家が賀来の下司職に任命された頃（1179年）は、平家から源氏へと政権が動いた頃である（1180年に頼朝が伊豆に挙兵し、1185年には平家が壇の浦で滅びている）が1179年には平家が九州を支

配していた。

参考

◎ 莊園と職（シキ）

莊園は八世紀頃から存在したとされるが、律令制度の崩壊にともなって発達し、十一世紀以後には本家職（ホシケシキ）、領家職（リョウケシキ）、郡司職（グンジシキ）、下司職（ゲシシキ）、名主職（ミョウシュシキ）などのような身分、地位、職掌などとともに、収益権をとまなう職（シキ）が任命をもって成立し、世襲されるようになった。

一つの莊園には、莊園領主の本家職と領家職から、現地では下司職、公文（クモン）職などの莊官職、さらには名主職、作職などの職が一つの土地に幾重にも重なり、権益となるという構造を示していた。

莊官は、莊園領主によって任命され、年貢の徴収・上納や治安維持にあたるが現地の有力者を任命することが多かった。莊官には下司、公文、田所（莊園の三職）などがあつたが、下司（中央の上司に対する語）がいちばん大きな権限を持っていた。また、領主は、莊園全体を統括する管理人として預所（アズカリドロコ）・雑掌（ザツショウ）などと呼ばれる役人を派遣することもあつた。

豊後には、阿南（アナミ）莊、臼杵（ウスキ）莊、大神（オオガ）莊、緒方莊、賀来莊、佐伯莊、都甲（トゴウ）莊、戸次（ヘツギ）莊など豊後大神氏（後述）にゆかりの莊園が多いが、九州最大の莊園領主は宇佐八幡宮で、九州一円に莊園を有していた。

◎ ご恩と奉公

鎌倉幕府（1192年）が開かれると、幕府とご家人との関係は、土地を媒介とすることご恩と奉公の関係で、奉公は合戦に参加すること、ご恩は土地または土地の利益権を与えることであつた。将軍が地頭職（ジトウシキ）の任命権をもち、ご家人の本領にたいする権利を、本補地頭という形で保障し、合戦の勲功には新補地頭という形で、平家の土地や謀反人の土地を没収してその土地に対する権利を給付した。このほかに新補率法地頭という地頭の得分率を法令（新補率法）で決めて恩賞とする方法が、承久の乱（1221年）以後行われた。

後鳥羽上皇を中心とした公家勢力が幕府打倒の兵を挙げ失敗したのが承久の乱であるが、この乱後、乱に荷担した公家などの没収地をご家人に地頭として与えたが、その権益が現地莊園領主や莊民との間で食い違うことが多く、その調整のためこの法令が定められた。しかし、調整はなかなかうまく行かず、各地で訴訟が起こつた。

一 賀来（加来）氏の祖

賀来氏は豊後大神（ブンゴオオガ）氏からでている。惟基には、惟房（高知尾太郎惟政・三田井政次）、豊後大神氏の祖は、学者のあいだでも数説があるが、惟季（阿南次郎・四穂田次郎）、惟則（野尻三郎）、平安時代のはじめの仁和二年（886年）、豊後介となつて下向した大神朝臣（オオミワノアソミ）良臣（ヨシオミ）の孫の大神惟基（オオガコレモト）であると説が有力である。

大神良臣は仁和五年（889年）に任期が終えて職を去ろうとしたときに、人々がその徳を慕って留任を請い再任された。さらに寛平五年（893年）に再任の期が満ちて帰郷しようとしたところ、ふたたび惜慕されたため、太宰府はその子の庶幾（コレチカ）をどうめて大野郡領とした。この庶幾の子が惟基である。

惟基には、惟房（高知尾太郎惟政・三田井政次）、惟季（阿南次郎・四穂田次郎）、惟則（野尻三郎）、惟顕（直入四郎）、惟清（城原五郎）、惟通（朽網六郎）、惟平（植田七郎・季定）、栄基（大野八郎・基平）、惟盛（臼杵九郎・三重九郎大夫）の九人の男子（うち四人は庶子であるか、早世したためか五人とする系図もある）がおり、末子の惟盛が賀来氏と佐伯氏につながる。

惟盛から惟家までは約二百年近く離れているので、この間七から八代を経ていると考えられるが、各家の系図はいづれも代が足りず脱落があると思われる。

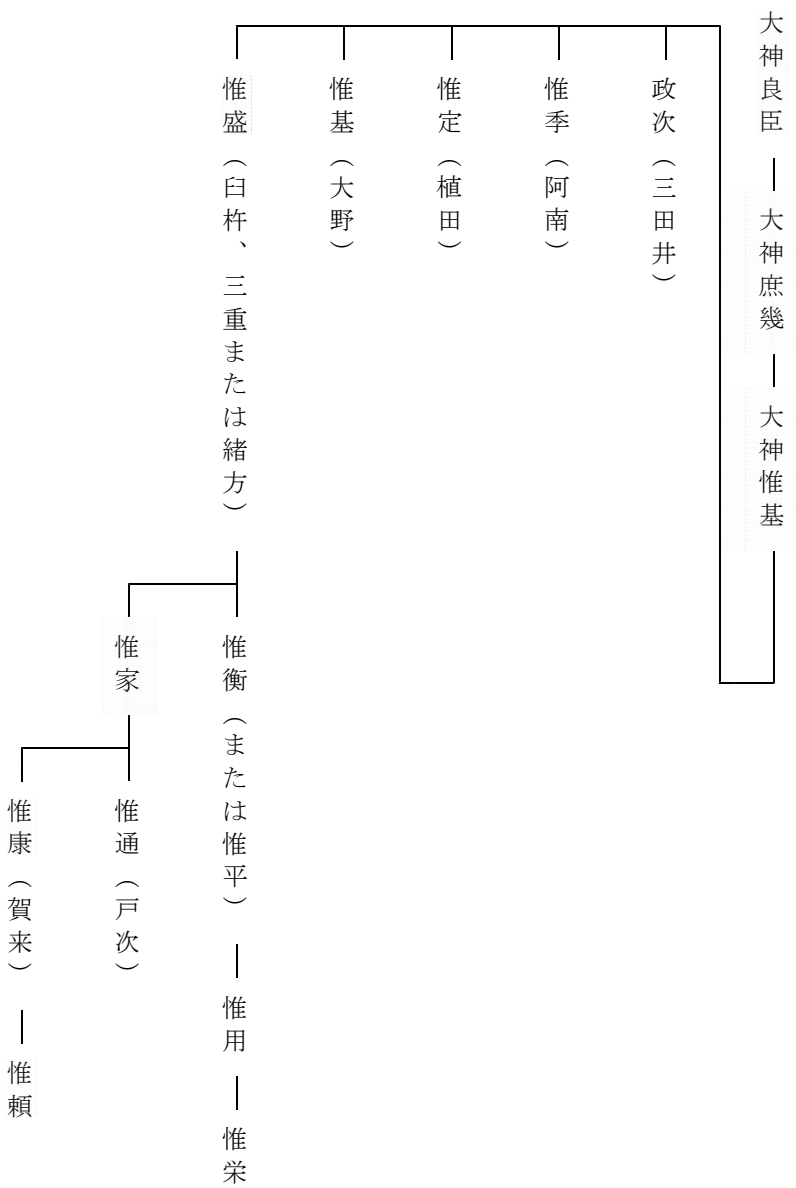
大神朝臣良臣の祖先は、大和の大神（三輪）氏で、

素サ鳴命（スサノオノミコト）に始まり、大和の国一の宮大神（オオミワ）神社の大神主家であった高宮

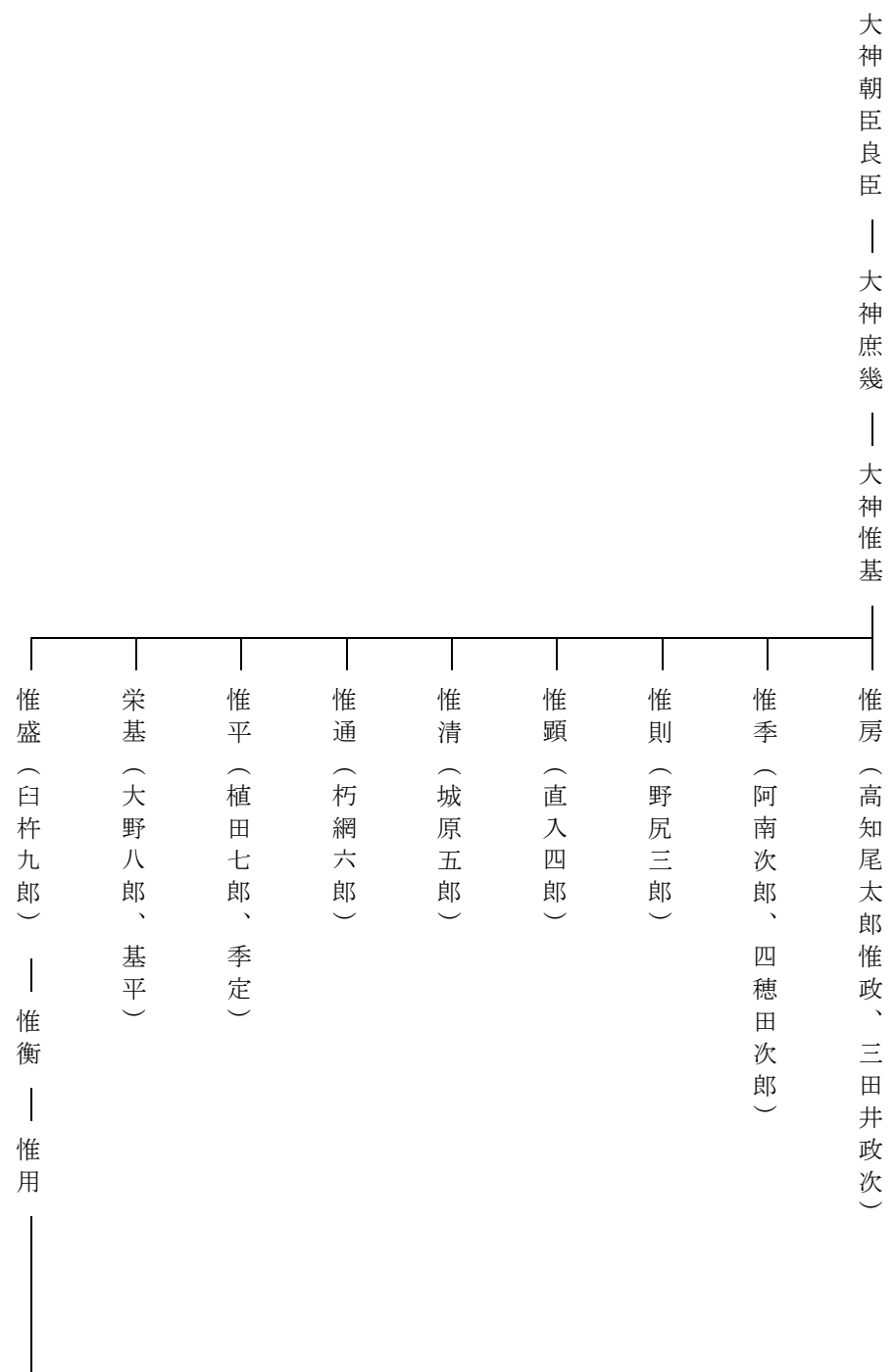
（コウノミヤ）家として続き、その系譜は奈良県立図書館に三輪叢書として保存されている。

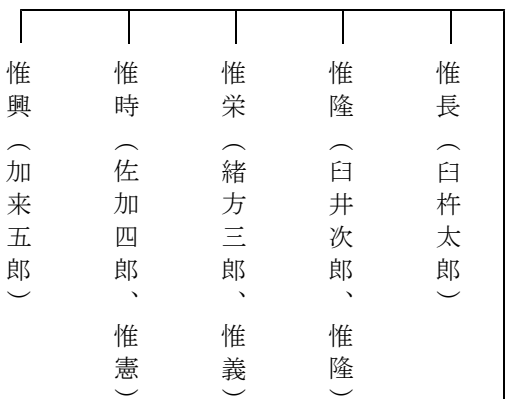
参考

◎ 大神姓豊後賀来氏系図抄（京都 賀来氏）



◎ 大神姓緒方氏系図抄（町田 緒方氏）





二二 豊後大神氏の活躍

豊後大神氏の始祖とされる大神惟基は、文武両道に優れ、十世紀の前半ごろその子と共に豊後の国の南半を領有していた。

末子が惟盛で、臼杵、緒方、三重、戸次、佐賀、佐伯、賀来氏の祖である。この緒方氏の中から平家物語や源平盛衰記で有名な緒方惟義が出現する。

大神惟基は、源平盛衰記では、あかぎれ大弥太（あるいは大太）と呼ばれているが、平家物語では、あかがり大太として「緒環（オダマキ）」の章に有名な物語を残している。その要約を記すと次のようである。

豊後の国の片山里に昔娘がいた。ある人の一人娘で夫もなかったが、そのもとへ男が夜な夜な通ってきているうちにその娘は身重になった。母がこれを怪しんで「おまえのところへ通ってくる者は、だれか」と娘に聞いたが、娘は、「来るときは知っているけれど、帰るときはわからない」とのみ答えた。「それでは、男が帰るときに、目印をつけて行き先を調べてみなさい」と教えたところ娘は、朝帰りする男の水色の狩衣のくびに針をさし、賤の小手巻（シズノオダマキ）というものを着けて、行き先をたどって行ったところ、豊後と日向の国境の姥嶽（ウバガタケ）という山の裾の大きな岩屋の中へとつながっていた。

娘が、岩屋の口で「私がここまで参りましたからお目にかかりとう存じます」というと、「私は、人の姿をしていない、あなたは私の姿を見るとびっくりするから、早く帰ってくれ、あなたがやどしている子は男

の子である。弓矢をとっては九州二島に並ぶものがない者となる。」といった。娘が重ねて、「たとえどのようなお姿であっても、日頃のよしみをどうして忘れましょうか、姿を見せてください」というと、「それでは」と岩屋の奥から臥長（フシタケ）が五・六尺、跡枕べは十四・五丈もあるうかと思われる大蛇がはいだしてきた。

狩衣のくびに刺したと思った針は、大蛇の喉ぶえを刺していた。娘はこれを見て気を失い、連れてきた家来十余人も倒れ、慌てふためき、大声で叫んで逃げ帰った。

娘は、帰宅した後、ほどなく、男の子を生んだ、母方の祖父の大太夫が育てたが、十才にもならないのに、背は大きく、顔は長く、丈が高かった。

七才で元服させ、大太と名付けた。夏も冬も手足に大きなあかぎれをいつもつけていたので、あかがり大太と呼ばれた。大蛇は、日向の国で崇められている高知尾の明神の御神体である。

これは、平家物語が緒方惟義の生まれについて「彼の惟義は、恐ろしきものの末なりけり」として記している伝説であるが、源平盛衰記にも同様の話がある。

惟基については、天慶二年（939年）からの藤原純友の乱に際して、同四年八月十八日に、追討凶賊使権小式源経基に日向において生け捕りとなったと記録されている純友の次將佐伯是基が惟基であるという説があり、惟基はこの後、京都に連行され、四条河原で

首を切られようとしたとき、次のような和歌をよみ、
叡感あつて赦免されたというのである。

これもとか都詣でのからころも

くびかみよりやたち初めけん

惟基の子が惟盛である。惟盛は白杵氏を称している
ところから、大分県海部郡丹生郷白杵の地に居住し、
撰関家領白杵荘を治めたものと考えられている。白杵
氏は、白杵石仏の建造に関与し、緒方郷司、三重郷司
等を兼ねていた。

惟盛の子孫の緒方三郎惟義（惟栄、惟能、コレヨ
シ）は、先にも触れたように、平氏を破った源氏方の
雄として歴史にその名をとどめている。

緒方惟義が歴史に現れるのは、養和元年（1181
年）の二月二十九日に肥後の国の菊池次郎隆直ととも
に豊後の国の緒方三郎惟義（能）が平家に背いたとい
う知らせが都にとどいたときである。

この年の二月四日には平清盛が死去していた。

惟義は、もともとは平重盛の家人であったがここで
平家に背き源氏方についていたのである。

平家物語は次のように記している。

豊後の国は刑部卿三位頼輔卿の国なりけり。子息頼
経朝臣を代官に置かれたり。京より頼経の許へ、平家

寿永二年（1183年）五月 木曾義仲、越中で平維盛の軍を破る。

七月 平家、天皇、神器を奉じて都を落ちる。

八月 後鳥羽天皇踐そ。

八月 平家太宰府に落ちる。

十月 緒方惟義ら太宰府を襲い平家を追い落とす。

元暦元年（1184年）一月 平宗盛、安徳天皇を奉じ一の谷に城を構える。

一月 白杵惟隆、緒方惟義備前の国に渡海し、今木城によるが能登守教経に攻められ、
豊後に帰る。

二月 範頼、義経一の谷を攻め、平家屋島に逃れる。

七月 緒方惟義ら宇佐宮宝殿を焼討ちする。

二年（1185年）三月 平家壇の浦で滅亡。

この後、緒方惟義らの動きを記すと次のようになる。

五月 義経、腰越状を鎌倉に送るも許されず。

十月 緒方惟義、宇佐宮焼討ちを特赦される。

十一月 義経、緒方惟義ら豊後武士を味方につける。

同月 義経、強風のため大物浦で遭難する。

十二月 頼朝、豊後を自分の知行国（関東御分国）とする。

は神明にも放たれ奉り、君にも捨てられ参らせて、帝
都をいで、波の上に漂う落ちうどとなれり。しかるを、
鎮西の者どもが請け取りて、もてなすこそ奇怪なれ。
当国においては従うべからず。一味同心して、追出す
べき由、宣い遣わされたりければ、頼経朝臣これを当
国の住人緒方三郎惟義に下知す。
彼の惟義は、恐ろしきものの末なりけり。（以下、
惟基の伝説）

この緒方の三郎はあかかり大太には五代の孫なり。
かかる恐ろしきものの末なりければ、国司の仰せを院
宣と号して九州二島にめぐらしふみをしければ、しか
るべき兵とも惟義にしたがいつく。

源平盛衰記は、

惟義仰せを蒙り、即当国は言うに及ばず。九国二島
の弓矢取輩に相触。かかりければ、白杵、戸槻、松浦
党以下、平家を背き、惟義が下知に従う。

と記している。

このあと、惟義と平家とのやりとりがあるが、結局、
平家は惟義によつて九州から追い出される。

平家の都落ちから滅亡までを経年で記すと次のよう
である。

文治二年（1186年）六月 朝廷、宇佐宮焼討ちについて詮議する。

十一月 緒方惟栄、臼杵惟隆、佐賀惟憲（いずれも兄弟）が義経の味方をしたかどで遠流となる。

緒方惟栄は、上野国沼田荘に配流され、後、許されて豊後に帰国する。

参考

◎ 平家物語

徒然草（ツレヅレグサ）には、平家物語は後鳥羽上皇の治世（十三世紀はじめ）に信濃前司行長がつくったという記述があるが、定説は多数の作者の多数の作があり、建徳二年（1371年）に没した覚一なる人物が整理したものが代表的であるとされている。保元、平治の両乱から平家が没落するまでの約七拾年間を記した軍記物語である。

◎ 源平盛衰記

室町時代中期（十五世紀）に完成したと考えられている軍記物語。作者は不明、源氏と平家の興亡を描いている。

四 豊後賀来本家のものがたり

賀来家初代の惟康は十二世紀末から十三世紀にかけての人物であるが、当時の豊後の政治的状况を述べる。

1185年に平家が壇の浦で滅亡した後は、頼朝が天下に覇をとるが、豊後は緒方惟義らが義経に味

方したこともあって、頼朝自身の知行国とされ関東御分国と呼ばれた。その後、建久七年（1196年）に仲原親能が守護と鎮西一方奉行をかねて任命され、建

永元年（1206年）ごろ養子の大友能直に譲り渡し、幕府から安堵された。大友能直は頼朝の庶子または寵童とされる人で、豊後には住まず京都に住み、貞応二年（1223年）に五十二才で死去した。

賀来惟康は、大友能直と二代の親秀に仕え、賀来の荘を治めて九十六才で没した。長子の惟頼が家を嗣ぎ、次子の惟興は豊前下毛郡大畑の城主となり大畑を加来村と称した。三子の惟貞は同郡犬丸の城主となり、四子の惟成は同国築城郡塩田（エンダ）の城主となった。

その後、賀来本家は三代惟綱が大友二代の親秀に仕え、承久の乱の宇治橋の合戦で功績をあげ賀来の地頭に任じられ、四代惟直、五代惟久、六代政直、七代政広とこれを嗣いだ。一方、大友家は三代の頼泰が文永八年（1271年）、幕府が異国（蒙古）防御のため鎮西御家人の下向を命じたのに従って、高国府に下向し、少弐経資（ショウニツネスケ）とともに九国奉行

人として蒙古軍の襲来の備えを固めていた。同十一年（1274年）十月、蒙古軍三万が九百の軍船で襲来し、博多湾に上陸し幕府軍と戦ったが、夜半の暴風で軍船のほとんどを失い退却した。

この戦いに、賀来政広とその子の八代惟之が従軍して元人を捕虜にした。政広はこの後大友四代の親時に仕えた。

弘安四年（1281年）再び蒙古軍が軍船三千五百、兵十万で来攻、政広及び惟之が従軍して敵將を捕虜とした。七月一日、風雨のため蒙古軍は壊滅した。

九代政光は大友五代の貞親に仕え、十代惟光は大友六代の貞宗に仕えた。

元弘三年（1333年）後醍醐天皇が北条幕府討幕の軍を募った。大友貞宗は少弐貞経、菊池武時と博多の探題北条英時を討つ密約をしたが、途中変心し、菊池武時だけが北条を攻めて戦死した。その後、同年六月、足利高氏が天皇に内応して、貞宗に応援を求めてきたので、大友、少弐、島津が力を合わせて探題を滅ぼした。この時惟光も従軍し、活躍した。

建武の中興がなつて、大友氏は後醍醐天皇から豊後守護職を安堵され、賀来氏も本領を安堵された。

十一代惟持は大友貞宗、同七代の氏泰、同八代の氏時に仕えた。

建武二年（1335年）、足利尊氏が鎌倉で兵を挙げ、これを討伐するための後醍醐天皇の召しに応じ、氏泰の名代として大友貞載が新田義貞の軍に従っていたが、尊氏に内応した。このため、新田軍は敗北した。この戦に惟持も参加していたと思われる。その後、尊氏は、京に入ったが、義良親王を奉じた北畠顕家に敗れ九州に逃れた。

建武三年（1336年）三月二日、尊氏は筑前の多々良浜で菊池武敏と戦い、これを破ったが、惟持はこの戦いで討死した。

十二代は、長男の源智が宇佐八幡の社僧であったため、その子の惟興がこれを嗣いだ。

惟興は、大友七代の氏泰、同八代の氏時に仕えたが、延元元年（1336年）の森木の役（詳細不明）で功績があつた。

十三代は惟興の養子である惟勝が嗣いだ。惟勝は大神一族の戸次采女の子であつた。惟勝は大友八代の氏時に仕えたが、康安元年（1361年）八月六日筑前

香椎の戦いで戦死した。

前述の建武三年の多々良浜の戦以後、尊氏は東上し、湊川で楠正成を破り北朝をたて幕府を開いた。南朝は延元元年（1336年）に九州に懐良親王（カネナガシンノウ）を派遣したが、親王は足利氏の内紛等に乘じて九州で勢力を延ばした、大友氏も一時期南朝軍に従ったが、延文三年（1358年）南朝軍から離反し、親王は菊池武光とともにこれを討った。この一連の戦いのなかで惟興は討死した。

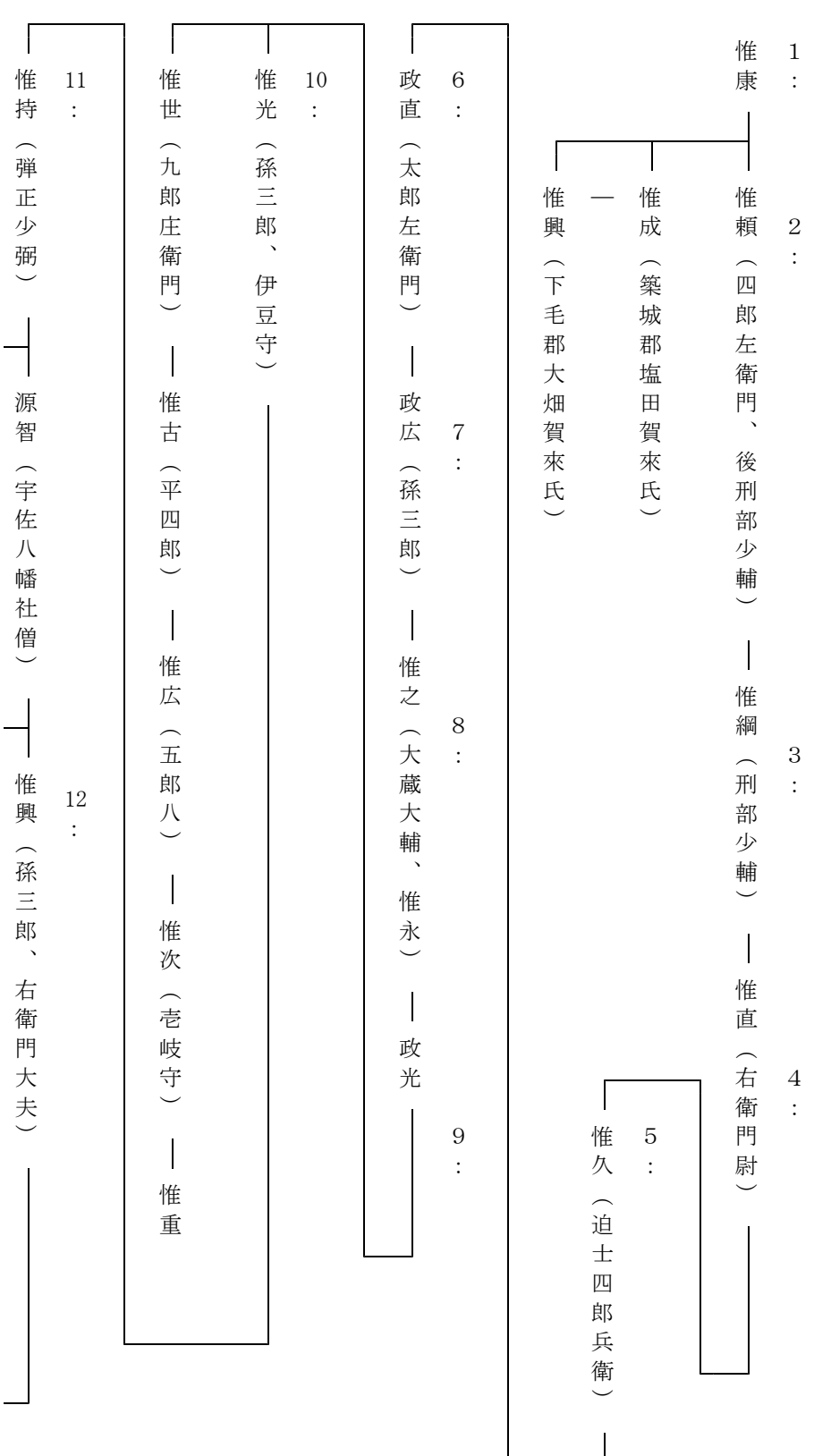
十四代は惟勝の子の直勝が嗣ぎ、大友九代氏継に仕えたが、貞治元年（1362年）菊池武光との戦いに敗れている。

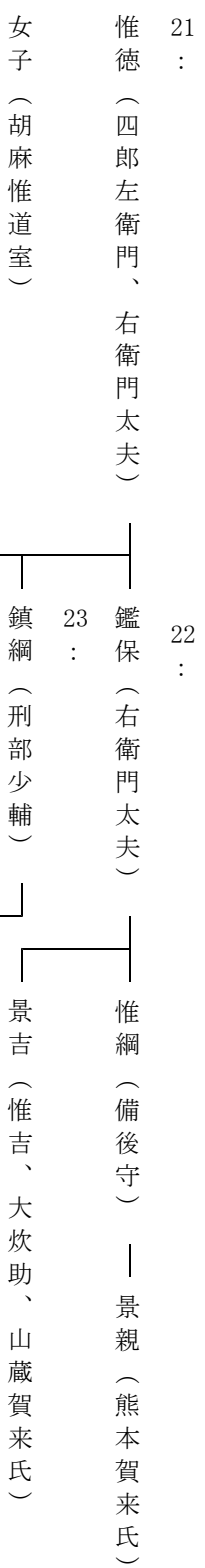
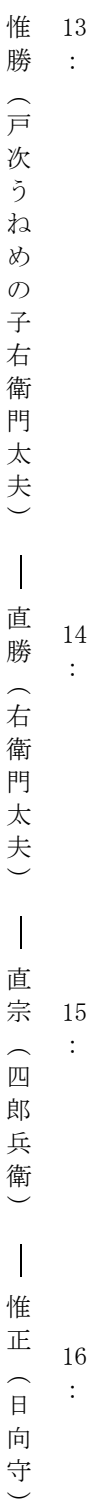
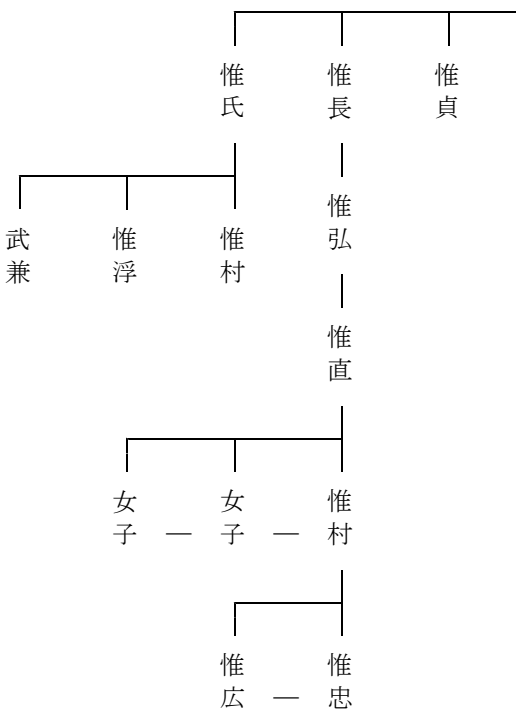
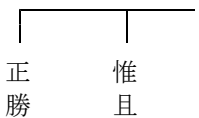
十五代は、直勝の子の直宗が嗣いだ。以後、十六代惟正、十七代惟広、十八代惟景、十九代景広、二十代惟清、二十一代惟徳と嗣いだが、とくに事績がない。

二十二代の鑑保の時に賀来の騒動といわれる事件が起こっている。

参考

◎ 大神姓豊後賀来氏系図抄（京都 賀来氏）





二十四代以後は由原八幡宮宮司を勤め江戸時代にいたり、維新後不明

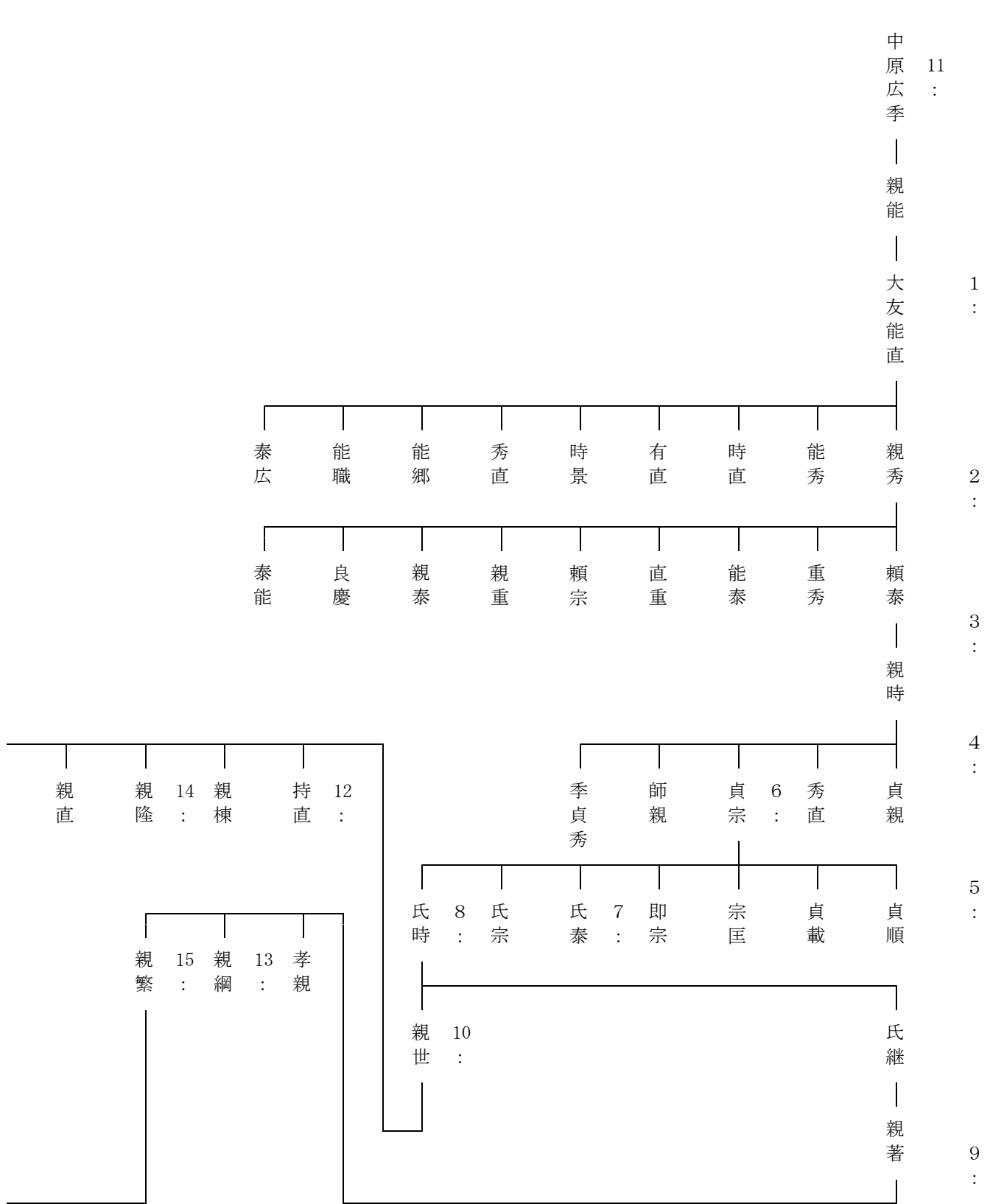
24：は賀来本家の代を示す。

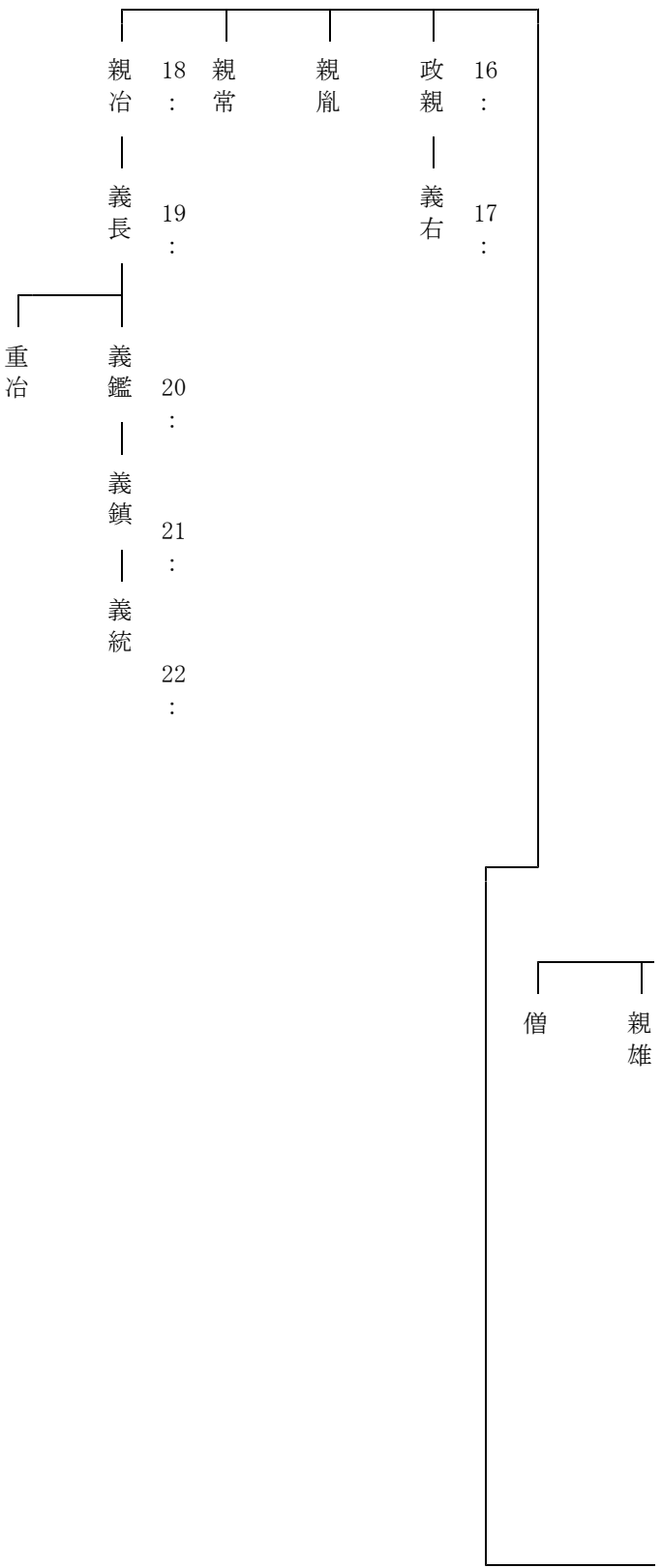
参考

◎ 多々良浜の戦い

合戦史上もつとも奇妙な戦いとされる戦いで、足利尊氏方は約一千騎、対する菊池武敏方は約六万騎といわれ、戦場は筑前の多々良浜の干潟であった。合戦は午後から始まったが、折しも北風が強く起こり、砂塵がもうもうとして菊池方に吹きよせ、この風と共に足利勢が攻め込み、菊池方に松浦党の裏切りがあったとはいえ、足利方が五十倍もある菊池方を数時間で破った。

◎ 大友氏系図抄





22：は大友氏の代を示す。

賀来の騒動

この時代、賀来本家の当主は賀来右衛門大夫鑑保（1463-1530年）であった。

鑑保は寛正四年（1463年）賀来の館にうまれた。大友氏二十代の義鑑（ヨシアキ）に仕え、その名の一字をもらっている。

大友の家臣に三派があつた。大友氏の一族を御紋衆と称し、大友氏とともに鎌倉より来た者の子孫を下り衆と唱え、その前より土着していた諸士を国衆と呼んでいた。

当時大友氏の館に、当国他国の諸侍が当番非番に分れて、出仕する大番役所があつた。また、大友氏の譜代や外様の家老、番頭その他勤番の者の休憩所があつた。これらの諸士は氏姓の高下、新参、古参、譜代等に從つて座席を定め勤番簿に各自の姓名を記して出仕していたが、享録三年（1530年）春に不慮の出来事が発生した。

それは、あるいたずらものがいて、故意か戯れか、大友一族の姓名の上に墨を塗った。この三派は平素から仲が悪くたがいが高下を争っていたため、このことを聞いて、血気にはやる御紋衆の若者どもが捨ておかなかつた。寄り集まって「これは聞きずてならないこ

とである。われわれの姓名の上に墨を塗ったのは、かねてわれわれを妬ましくおもっていた国衆か外様の者のいたずらであろう。」と言っていたが、やがて「このままに捨て置くと増長して終には制することができなくなる、主君に訴え遺恨を晴らそう」ということになった。

心ある老人どもは、もつてのほかのことである、ついには大友家の大事になると若者どもを制したが聞き入れず、ついに大友屋形に言上した。

義鑑は、どうすべきかと迷っていたが、御紋衆の訴えももつともというような言葉のふしもあつたのか、「主君はもう心をきめておられるぞ」とついに騒動になつてしまった。

清田越後守という御紋衆の若侍が手勢二百騎ばかりで、外様の本庄但島守中村左衛門の館に押し寄せこれを討ち取った。つぎに清田勢は一千五百人を集め、近くにあつた賀来の館に攻めかかった。ここでやむなく賀来勢は加勢を集め、ついには清田勢を撃ち破つたが賀来鑑保は戦死した。

加勢をした大津留常陸介らは、このままではすまないであろうと、豊前に逃れ京都郡城井の宇都宮氏を頼った。

賀来鑑保の子の惟綱、景吉二人は賀来の館に火をかけ、家臣数名と加勢の橋爪鑑種と伊予にわたり、鑑保

の弟鎮綱、惟重二人は豊後佐伯に走った。これが「賀来の騒動」である。

大津留はその後帰参、橋爪も許されて旧領を安堵された。また、鎮綱も後日大友義鑑により佐伯から召しだされ、賀来の地頭職に復帰し、由原八幡宮の大宮司をも兼ねることとなった。鎮綱が二十三代である。

五 各地の賀来（加来）氏のものがたり

豊前、豊後各地の賀来（加来）氏についての記録が多いのは、おおむね、十五世紀から十六世紀であるので、このころの豊前と豊後の政治状況について記す。

豊後の守護職は前述のように大友氏であったが、十六代の政親と十七代の義右との間で争いが起こり、家臣もこの二派に分れて争った。明応五年（1496年）、義右は政親に毒殺され、政親は義右の妻の父であった大内義興に捕らえられ切腹させられた。政親の弟の親治が大友氏十八代を継ぎ、同七年（1498年）頃に豊前の守護をも兼ねることとなった。一方豊前の守護を代々勤めていた大内義興は、これを怒り、大友氏と戦端を開いた。

文亀元年（1501年）大友親治は家督を子義長に譲り、豊後、筑後、豊前の守護とした。このため、菊池成朝の助けをえた大内義興との間で激しい戦争状態となった、永正六年（1509年）頃大内義興は豊前の守護職を回復したが、その後永正十五年（1518年）これを辞して長門に帰国した。

同年大友十九代の義長が死亡し、子親安（後の義鑑）が大友二十代を継いだ。大友氏は享祿四年（1531年）以降も大内氏と戦火を交え、天文六年（1537年）和議が成立するまで戦火が続いた。大友氏は四国にも出兵したが、大友義鑑は天文十九年（1550年）国衆と加判衆の争いにより死亡、義鎮が大友二十一代の家督を継いだ。天文二十年（1551年）中国の大内義隆が同じように家臣の反乱で死に、後を継いだ大内義長も（1557年）に毛利に滅ぼされた。

永祿二年（1559年）、大友義鎮（宗麟）は豊前、筑前の守護となったが、その後毛利軍とも戦火を交え、天正六年（1578年）島津軍とも戦ったが耳川で大

鎮綱は、天正年間（1586年頃）大友二十一代の義鎮（永祿五年（1562年）宗麟と号した）から大友と島津の合戦の際の手柄によって感状をもらったとの記録がある。

この後、鎮綱の子孫は、代々由原八幡宮の宮司を勤めていたが、明治維新後の消息は不明である。

敗した。その後豊臣秀吉に援を請い、天正十五年（1587年）に、秀吉の九州征伐に加わった。この功で宗麟は日向を（後に辞退）、その子大友二十二代の義統は豊後国を（義統の子吉統のとき没収される）与えられた。

さらに、豊前築城郡付近の当時の状況は次のようであった。

この地は、建久六年（1195年）に源頼朝から豊前の守護職に任じられた下野宇都宮氏の分家の城井宇都宮氏が治めていたが、十六世紀前半は宇都宮十六代の正房の時代であった。

正房は、文明十年（1478年）豊前で生まれ、一貫して大内氏の幕下についた。天文二年（1533年）には上洛して足利義晴將軍の軍に加わった記録がある。永祿四年（1561年）に没している。

正房の長子の長房は文亀六年（1506年）の生まれで、宇都宮十七代を継ぎ長甫と号した。室は大内義興の娘である。その子の十八代鎮房の室は大友義鎮の妹であることから、宇都宮氏は大友、大内両氏の激しい争いの間で苦労していたと思われるが、永祿七年（1564年）以降天正六年（1578年）までは、大友氏に従ったようである。

天正十四年（1586年）、大友宗麟の求めを請けた豊臣秀吉は島津氏討伐の軍を起こした。同年十月、先遣隊として、黒田孝高らが派遣され、十一月、築城郡の宇留津城が攻められ、落城し、城主の加来久盛の子の盛勝らが戦死した。秀吉は、天正十五年（1587年）三月二十五日に十二万余騎を引き連れて小倉に

到着したが、城井城主宇都宮鎮房は病氣と称して、子の弥三郎朝房が名代として秀吉に拝謁した。ほかに下毛郡の加来安芸守統直なども金銀、太刀などを捧げた。

この後、秀吉は秀次を大将として宇佐郡の宮成吉衛門を攻めこれを降参させ、さらに、田川郡岩石城を朝房を案内人として攻め落城させる等付近の城を平定した。さらに島津をうち、島津義久らは鹿児島に帰城した。

同年六月、宇都宮朝房にたいして伊予今治で十二万石を与えるとの御朱印が出された。しかし、鎮房は豊前国は、頼朝以来の地であるので国替えは承知できないと、朝房に御朱印を返させた。秀吉は甚だ不快に思いこれが宇都宮氏の滅亡の原因となった。

秀吉は、黒田勘解由孝高に豊前六郡を領地として与え、中津に居城を築かせた。宇都宮鎮房は城井にたてこもり一戦を企てた。このとき一族郎等として、加来備前守、同弟次郎佐衛門、加来藤兵衛惟元（惟基）等が加わり、さらに下毛郡から加来城城主加来安芸守統直などが同調した。

黒田孝高は驚き、直ちに一万二千余騎で宇都宮を攻めた。しかし、戦いは決せずいったんは、小倉城主毛利老岐守勝信の仲介で和睦となり、鎮房は城を明け渡し田川郡赤郷に移った。

その後、黒田孝高は豊前の平定を図り、同年九月、加来統直が籠っていた加来の城に押し寄せこれを落とし加来統直は討死した。

参考

◎ 妙見宮縁起

築上郡椎田町奈古字向屋敷に所在する葛城神社妙見宮には縁起記があり、それによると、豊前国築城郡奈古庄岩丸村葛城山天合の峯は九曜中座の大星を妙見星という。すなわち星の神霊なり。故に号を妙見宮と奉る。

仁王七十二代白川院御宇承保三丙辰歳（1076年）三月十五日神官藤原時人（藤原道兼の子）神告ありて件の三大星岩丸葛城山一天に光を放って降る。見る者数人。亦一童子あり来たりていわく、彼の天合の峯は勝地の故に妙見三神垂じやくの奇端いちじるし。

三殿の保古良を建立し崇め奉るべし。郷里繁栄武運永久五穀豊富の守護神なりと言い終わって形隠る。すなわち里人集まり衆議一決して社を葛城山に建つ。（妙見宮創建）

六條院御宇仁安二丁亥歳（1167年）七月郡中従い、風鎮め願心により地下踊りあり。

御堀河院安貞二戊子年（1228年）九月紀伊城主（三代宇都宮信景）祈願により五騎やぶさめを張行す。

正中二乙丑歳（1325年）十月宮炎上し、宮殿拝殿一字残らず灰塵と成す、このとき往古の明記証文宝物等ことごとく焼失す。

天正十六年になり、鎮房はだまされていたことを悟り、城井の城を奪回しこれに籠った。孝高は秀吉に言上して、二万三千余騎で城井を攻めたが、峻険を頼む宇都宮方にさんざんにうち破られてしまった。

そこで黒田孝高は一計を案じ、和睦をすると共に、鎮房の娘の一人を、自分の子の長政の嫁にすると約束した。

その後、天正十七年四月二十日、孝高は、ご馳走すると称して中津城へ鎮房を招き、屈強の兵を潜めて、鎮房を討ち取ってしまった。この時従った家来も討たれあるいは切腹した。

以上の記述にでて来る加来氏のうち、宇留津の加来久盛は、豊後賀来本家二十二代の鑑保の弟の惟道の子であり、加来城の加来安芸守統直は、大畑の賀来氏で初代惟康の弟の惟興の子孫である。

このほか、宇都宮、鎮房が討たれたとき従っていた供の中に物頭の加来藤兵衛惟元がいる。この惟元は、築城郡葛城村の葛城神社妙見宮の文書で、豊後から永禄六年（1563年）に来たとされる加来惟定の子で、前述の賀来の騒動の時、佐伯氏のもとへ逃れた賀来惟重（統幸）の孫であると思われる。

この惟元は宇都宮氏に仕えて、葛城村奈古に屋敷を構え、奈古の加来氏となった。筆者はこの流れである。

永録六葵丑歳（1563年）十二月廿日、加来刑部少輔大神惟定、豊後より豊前の国築城郡奈古の岩丸山中に來たり居住す。同七年正月十日惟定一七日（一週間）妙見宮に参籠し心中の祈願重々なり。満日童子出現して語りていわく、汝数日の願心信心堅固なり、汝の祖先は惟基より代々相続して今汝に至り神孫なり。是れ故に大神をもつて姓となし永世神明尊崇之心忘るるなかれ、もつて吾言うことを神主に告げよ。言い終わって見えぬ。惟定感嘆し神託をもつて神主里人に告げ大宴を設け、村村長と衆議を決め年中祭礼の儀式神官、次官、列座の次第これを定む。

天正歳中（1574-1591年）野火岩丸山天合峯に入り妙見宮焼け滅ぶ、天正十九歳（1591年）宮を奈古之境に建立し神体を遷座し奉る（現妙見宮の位置はこれに準ず）。

とあり加来惟定が登場する、また、筆者が平成二年四月（1991年）、妙見宮の宮司宅に赴き、縁起を見せてもらったところ、「惟定は、父惟重の同意を得て」前記の大宴を設けたと記されてあった。

◎ 司馬遼太郎著、週刊朝日連載「街道をゆく」から「中津・宇佐のみち」⑦

城下町には、寺町がある。中津にもある。（中略）合元寺がある。建物の壁も、練堀も赤い。（中略）さて、合元寺の門前に立っている。中津市の教育委員会の掲示板がある。

・天正十七年四月、孝高（黒田如水）が、前領主宇都宮鎮房を謀略結婚により中津城内に誘殺したとき、その謀臣らが中津城を脱出し、この寺を拠点として奮戦し、最後をとげた。

以来、門前の白壁は幾度塗り替えても血痕が絶えないので、ついに赤壁に塗られるようになった。当時の激戦の様子は、庫裏の大黒柱に刃跡が点々と残されている。

まことに、おそるべき事件である。

宇都宮氏は、その遠祖が、下野（栃木県）の宇都宮から出たことは、いうまでもない。源頼朝が平家をほろぼしてから、この氏を豊前国城井郷の地頭職にした。「宇都宮系図」では、文治元年（1185年）とあり、頼朝の代官の義経が平氏一門を壇の浦で敗滅させたとしてある。そのとしの十一月、頼朝はあたらしい全国統治のやり方として、諸国諸郷に守護や地頭をおいた。一説では、宇都宮氏は豊前国の守護に任ぜられたともいう。

宇都宮氏が四百年もこのあたりを統治したことを思うと、そのほろびが多分に時勢のせいとはいえ、ほろびぎわの悲惨さは、なんともいいようがない。この一族は為政者として悪かったわけでもなく、むしろ善政する家だったともいわれている。

最後の当主宇都宮鎮房は1536年の生まれで、天正十五年（1587年）、秀吉が九州を平定すべくやってきたときは、五十を過ぎていた。とほうもなく大男で、鹿の角でも引き裂くような力があつたという。

海山にあふれる秀吉の大軍をみて、「上方の成りあがり者めが」という気分もあつたろう。それに秀吉が豊後（大分県）の大友義鎮（宗麟）を応援しているのも気に入らなかつたはずである。さらにいえば、この時代、宇都宮氏のような国人やその配下の地侍は、名子とよばれる農奴を使役してじかに農地経営をしていた。

豊臣政権の天下政策というのは、名子を否定することにあつた。

国人、地侍を廃止し、その農地を名子たちに分与し、自作農として、豊臣大名がじかに彼らから租税をとるという仕組みで、まったく革命そのものだった。これに対し、国人、地侍としては俸禄をもらって武家奉公人になるか、農民になるか（この家系から江戸期、庄屋、名主が出た）、それとも第三の道を選ぶかだった。第三の道とは、反乱（一揆）である。九州はとくに彼らの不平で大地が地鳴りするようには沸騰していた。黒田如水が中津を中心とした豊前をもらったとき、この十二万石の小さい領国のなかでも、百数十もの国人、地侍がいてそれぞれの村落で小さな城砦をかまえていた。それらの大半が、秀吉軍の強大さの前に屈し、如水に付属し、多くが家臣になった。（中略）が、中津および山国川ぞいの国人、地侍は頑強だった。その頂点に宇都宮鎮房がいた。

「ただの百姓にする気か」と、名家意識からくる憤りが、反乱へのばねになつたろう。

鎮房は、ふるくからの族統である野仲、犬丸、賀来、山田などを従えてたちあがった。余談ながら、宇都宮鎮房は、秀吉が九州にきて大号令を發したときも、そのもとに駆けつけず、わずかに息子朝房を代理としてやっただけだった。

秀吉にとっては不快だったろうが、九州を平定したあと、鎮房の名家であることをおもったのか、伊予の今治に転封すべくとりはからったかのようである。が、鎮房はそれを不快としたのか、ぐずぐずするうちに、秀吉のほうはその気をなくしたらしい。

鎮房は、旧領のあちこちをさまよううちに、ついに武力抵抗に踏み切った。(中略)

宇都宮鎮房は、大分県側の山国川ぞいを同族の版図とし、自分自身は、福岡県の豊前にある城井(キイ)谷を根拠地にしていた。

城井谷は、寄手にとってはおそろしい要害であった。城の名は、城井城とか茅切城と呼ばれていた。まわりがけわしい山々にかこまれ、「口狭くして内広し」といわれていた。また、形が瓢箪に似ているため瓢箪城ともいわれたという。(中略)

鎮房がここに籠ると、上毛、下毛、宇佐などの諸郡の国人、地侍たちは大いに呼応した。(中略)

黒田長政が城井谷を攻めたのは、天正十五年も冬になってからだった。

この場合、長政にすれば城井谷を包囲し、砦ごと各個に攻めるべきだったが、大軍をたのみ、一気に、直線的に攻め、結果は戦国史上、まれなほどの惨敗を喫した。主立つものが多く討たれ、死者は九百に近かった。これに対し、天陰による宇都宮方の死傷はほとんどなかった。

肥後でこの惨敗を聞いた黒田如水は、重臣を秀吉のもとにやって相談させた。どうやらこのとき調略によって鎮房を謀殺するという話がきまったらしい。

秀吉は、子供相手のようなだまし方をした。関白の名において旗本の黒田大内蔵、山口玄蕃頭正弘がくだってきて、鎮房に、豊前において諸侯にすると約束したらしい。(中略) 武士は嘘をつかない、というのが鎌倉以来の風で、古い家系にうまれた鎮房はするように信じて生きてきたようである。

ただし、戦国も末期の統一期に入って政略が盛んになると、調略と称するうそが横行した。鎮房は、そういう世だということを知らなかったのだろうか。

戦いは凍結され、翌々年の天正十七年三月二十六日、ふたたび関白秀吉から教書が鎮房にくんだり、中津城において長政と対面せよといってきた。嫡子宇都宮朝房に対しても肥後への公務出張を命じた。肥後一揆もこの前々年、一揆側の敗北に終わっていた。さらには、豊後一揆も、黒田側が軟かな小城からつぎつぎにおとし、鎮房から手足をもぎとっていた。

このたい勢のなかで、鎮房としては、秀吉の教書を信ずることに賭けざるをえなかったのかもしれない。裏切られることも覚悟していたらしく、この時期の進退にみだれがないのである。

子の朝房は、肥後に入ったとき加藤清政の手勢に襲われ、奮戦して全滅した。十九才だった。どうも肥後の清政までが動員されていることをみると、宇都宮氏討伐の網は大きかったようである。

長政は、城にやってきた鎮房に酒食を供し、そのさなかににわかにかに殺した。

また合元寺で待たせてあった鎮房の手勢については軍勢をさしむけ、みなごろしにした。その血しぶきのあとが壁のあちこちにのこり、事件後、幾度塗りなおしてもなおあらわれるので、寺ではついに赤壁にしたというのが合元寺伝説である。(中略)

諸本をみてはつきりしていることは、宇都宮鎮房もその子朝房も、また城にいて変事を知ったのち自害をした八十才の鎮房の老父長甫も、みな堂々としていさぎよかったことである。鎌倉以来の武士道は、中央から遠いこ

ういう家へのこっていたのかもしれない。

参考

◎ 築城郡宇留津の加来氏

23 :

— 鎮綱

— 惟直（惟道、主税）— 久盛（孫兵衛、專順）— 盛勝（新外記）

— 景勝

◎ 下毛郡大畑の賀来氏

1 :

— 惟康— 惟興— 2 1代不明— 国治（老岐守）— 統直（安芸守）— 惟直（民部少輔）— 駿河— 判右衛門—

— 惟貫（勘助）

— 惟茂（佐助）

◎ 築城郡奈古の加来氏

22 :

— 鑑保

— 23 :

— 鎮綱

— 惟重（統幸）— 惟定— 惟元（惟基）— 秀兼— 朋治— 文助— 助右衛門— 文左衛門— 与三郎— 久左衛門—

◎ 築城郡塩田の賀来氏

1 :

— 惟康— 惟成— 二十五代略— 惟康（孫兵衛）

◎ 佐田村山蔵塔原の賀来氏

22 :

— 鑑保— 惟綱

— 景吉— 惟信

— 女

— 惟貞— 景友— 惟次

惟秋

—

惟繁（永松賀来氏）¹惟尚

—

惟之（中津、高田、佐田、近江日野の賀来氏）

—

惟定

22：は賀来本家の代を示す。

六 大神氏のものがたり

賀来（加来）氏の祖は、大神氏にはじまり、大神氏が豊後に土着したのは、仁和二年（886年）に大神良臣が豊後の介として下向し、その子の庶幾が大野郡領となったためであることは、さきにも記した。

大神良臣は大和の大神（オオミワ）氏の流れで、その系譜は多くの学者によって研究されているが、奈良県に現存する大神神社の神職家で崇神天皇（四世紀）の時代に、天皇によって見出された大田田根子命（オオタタネコノミコト）から歴史時代がはじまる。

古事記と日本書記に大田田根子命（オオタタネコノミコト）が崇神天皇の命により三輪山をまつたことが以下のように記載されている。

崇神天皇の御代に疫病が全国に流行し、人々が死に絶えようとした。崇神天皇はこれを愁っておられたが、大物主大神が夢に現れて、意富多多泥古（オオタタネコ）をもって私を祭らせれば、国が平安になるといわれた。そこで、使を四方にやって意富多多泥古という人を捜させたところ、河内の美奴（ミヌ）村でその人を見つけた。天皇がおまえは誰の子かとお問いになつたところ、わたくしは、大物主大神、陶津耳命（スエツミミノミコト）が女活玉依毘売（イクタマヨリビメ）と結婚して生ませた子、櫛御方命（クシミカタノミコト）の子、飯肩巢見命（イイガタスミノミコト）の子、建瓶槌命（タテミカズチノミコト）の子、僕意富多多泥古と申しますと答えた。そこで、天皇は大変歎こばれて天下が平穩になり、人びとが榮えるように

と詔を賜って、意富多多泥古命を神主にして、御諸山に意富美和大神（オオミワノオオカミ）を祭られた（古事記）。

崇神天皇の時代におおくの災害があつた。これはおそらく、朝廷に善政が無く、神がとがめられたからであらう。天皇は亀甲にうらなつて、ことのよしを極めてみようと、神浅茅原に御幸されて、八十万神と会つてうらなわれた。この時、倭トト日百襲姫命（ヤマトトトビモソヒメノミコト）が神がかりされて言われるには、陛下どうして国の治まらないのを憂つていられるのですか、若し、私を敬って祭られれば必ず平穩になるでしょうと。

天皇は、このように教えるのは誰の神かと問われた。答えがあり、私はやまとの国の内に居る神で名を大物主神といいます。そこで神がいうように祭りをした。しかし、ききめが現れなかつた。天皇はもく浴齋戒して殿内を潔めて祈つた。私は、いろいろとお祭りをしました。が、なにかご不満なことがあるのでしうか、ねがわくはまた夢で教えて頂き神の恩をきわめたいと思います。この夜、夢に一人の貴人が現れ。大物主の神と自ら名乗り、天皇、国の治らないことを愁いめさるな。もし私の子の大田田根子をして私を祭らせればたちどころに平安になりますと。また。その秋の八月葵卯朔巳酉に倭ト速神浅茅原目妙姫と穗積臣の遠祖の大水口宿弥と伊勢麻績君の三人が共に同じ夢をみて、昨夜、夢に一人の貴人が現れ、大田田根子命を大物主大神を祭る主とすれば、必ず天下が平穩になるであり

ましようと言上した。天皇は夢の言葉を聞いて喜ばれ、天下に告げて大田田根子を求められたところ、浅茅郡陶村にて大田田根子が見いだされた。

天皇は自ら神浅茅原におでになって諸王卿及び八十諸部を交えて大田田根子に質問された。あなたは誰の子ですか。答えは、父を大物主大神といい、母を活玉依媛（イクタマヨリヒメ）といいます。陶津耳の娘であります。また、奇日方天日方武茅又祗之女でもあります。天皇が物部連祖伊香色雄をして占わせたところ吉と出、また他の神を祭ろうとする不吉となった。十一月丁卯に伊色香雄に命じて物部の八十手が作った祭神の物をもつて、大田田根子を大物主大神の祭主とした。ここで疫病がやみ国内がようやくしずまり、五穀がみのつて百姓（オオミタカラ）がにぎわった。（日本書記崇神帝の巻）

この大田田根子命の祖先について古事記は次のように記している。

この意富多多泥古（オオタタネコ）という人を、神の子と知る理由は上記の活玉依昆壳（イクタマヨリヒメ）のいいつたえで、姫はみめうるわしかったが、ひとりのおとこがいて、そのすがたかたちは世にたぐいなかかった。夜半にときどききて、姫と相愛となり、ほどなく、姫が妊娠した。姫の父母はそのことを怪しんで、姫におまえは、夫もないのになぜ妊娠したか聞いたところ、みめうるわしい男がいて、その姓名（かばねな）は知らないが、夜ごとにきているうちに懐妊しましたと答えた。父母はその男の素性を知りたいと思ひ、娘に、赤土を床前に散らし麻を針につないで、男の衣のすそに刺せと教えた。娘は教えのとうりにして、朝みると、針をつけた麻は、戸の鍵穴から出て、のこった麻は三勺（みわ）のみとなっていた。この糸を手繰っていったところ美和山（みわやま）に至って、神の社に留まった。これが神の子なりと知った理由である。また麻が三勺遺つたため其地を美和（みわ）というようになった。（古事記中巻崇神天皇の条）

大三輪の神について日本書紀は次のように記している。

大己貴神（オオアナムチノミコト）と少彦名命（スナヒコナノミコト）は力を合わせ、心を一つにして天下を造られた。また現世の人々と家畜のために病氣治療の方法を定められた。また鳥獣や昆虫の災いを除くために、まじないの法を定めた。このため、百姓（オオミタカラ）は今日に至るまでその恵みを受けている。昔、大己貴命が少彦名命に語っていわれるのに「我らが造った国はよくできたといえるだろうか」と。少彦名命が答えていわれるのに「あるいはよくできたところもあるが、あるいは不出来のところもある」と。このものがたりは、思うに深いわけがあるようだ。その後、少彦名命が出雲の熊野の岬に行かれて、ついに常世（長生不老の国）に去られた。また、粟島に行つて粟莖によじのぼられ、弾かれて、常世郷に行かれたともいう。これからのち、国の中でまだ出来上がらないところを、大己貴命が一人でよく巡り造られた。ついに出雲国に至つて、言揚げしていわれるのに、「そもそも葦原中国は、もともと荒れて広いところだった。岩や草木に至るまで、すべて強かった。けれども私が皆くだけ伏せて、いまは従わないというものはない」と、そして「いまこの国を治めるものはただ私一人である。私とともに天下を治めることができるものが他にあるだろうか」と。そのとき不思議な光が海を照らして、こつぜんとして浮かんでくるものがあつた。「もし私がいなかったら、おまえはどうしてこの国を平らげることができたろうか。私があるからこそ、おまえは大きな国を造る手柄をたてることができたのだ」と。このとき大己貴神が尋ねていわれるのに、「おまえは何者か」と。答えて「私はおまえに幸いをもたらす不思議な魂、幸魂（サキタマ）、奇魂（クシミタマ）だ」と。

大己貴命が「そうです。わかりました。あなたは私の幸魂奇魂です。いまどこに住みたいと思われませんか」と。答えていわれる。「私は日本国（ヤマトノクニ）の三諸山に住みたいと思う」と。そこで宮をそのところに造つて、行き住まわせた。これが大三輪の神である。この神のみ子は賀茂の君たち、大三輪の君たち、また、姫たたら五十鈴姫命である。これが神日本磐代彦火出見天皇（カムヤマトイワレヒコホホデミノスメラミコト、神武天皇）の後である。（日本書紀

神代上)

この後、倭トト日百襲姫命（ヤマトトトビモモソヒメノミコト）を大物主神の妻とした。神は常に昼には見えず夜のみ来られた。倭トト姫命は夫に、あなたは昼にはおいでにならないから、明るいところで顔を見ることができません。どうぞ、しばらく留まってください。大神はそれはもつともである。明朝あなたの櫛箱に入って居よう。しかし、私の姿に驚いてはいけな

いといわれた。姫は心の中では怪しんだが、明るくな

参考

◎ 崇神天皇

天皇家の系譜によると第十代の天皇で、歴史上の存在が確実とみられる初代の天皇である。「ハツクニシラスメラミコト」すなわち、はじめて国を治めた天皇とも呼ばれ、又、おくり名が御間城入彦五十え（ミマキイリヒコイニエ）ともよばれ、三輪山周辺に新たに入った（イリ）王朝で、三輪山の祭祠権をもっていた旧勢力を服属させ、王朝を立てたとされ、崇神天皇からはじまる王朝（初期大和政権）は三輪王朝とも呼ばれている。

◎ 大神神社（オオミワジンジャ）

日本最古の神社とされ、三輪山を御神体とする。三輪山は、三諸の神奈備（ミムロノカンナビ）、御諸山（ミムロヤマ）等とも呼ばれる。大神神社には、神殿がなく拝殿のみである。拝殿奥にある独特の三つの鳥居の後方一帯の山は立入禁止である。山には多くの巨石遺跡があり、四―五世紀の遺物が出土している。山の神祭祠遺跡と呼ばれる。大物主神、大己貴神と少彦名神（いずれも同一神）が鎮まるとされている。

◎ 大直禰子神社（オオタタネコジンジャ）

別名を若宮といい、大神神社の入口にある摂社である。祭神は大直禰子命である。

◎ 箸墓古墳

奈良県桜井市箸中にある巨大な前方後円墳で全長が二百八十米、全国で第十一位の大きさを持つ、宮内庁管理の陵墓である。最古の大古墳とされ、築造時期は4世紀初頭である。倭トト日百襲姫を葬ったとされている。

大部主命、大友主命などについては、旧事記等に記述がある。

大田田禰古命は出雲神門の臣女美気姫を妻として、大御氣持命を生まれた、この命出雲鞍山祇姫を妻として大鴨積命及び大友主命を生まれた、大鴨積命は崇神天皇から賀茂君の姓を賜り、又、大友主命は同天皇に大神君（おおみわのきみ）の姓を賜った。（旧事記）

この後は、雄略紀に三輪君身狭（ミサ）が、用明紀

るのを待つて櫛箱を見ると、美しい小蛇（コオロチ）がいた、姫は驚いて大声を挙げた。大神は恥じてすぐに人の形になった。その後、あなたは我慢できずに私を恥ずかしめたといって、おおぞらをとんで御諸山に登られた。姫は仰ぎ見て悔いて、箸にて陰（ホト）を突いてなくなられた。姫は大市に葬られた。この墓をなづけて箸の墓と云っている。（日本書記崇神帝の巻）

に三輪君逆（サカフ）が、叙明紀に三輪君小ささぎ、皇極紀に三輪文屋（フムヤ）君、孝徳紀に三輪栗隈君（クリクマ）東人（アズマヒト）また三輪君大口（オクチ）、また小花下三輪君色夫（シキフ）、また、三輪君瓶穂があり。天智紀に三輪君根麻呂、天武紀上に三輪君子首（オビト）（後に眞神田氏を賜わった）があり、この子首のことは天武紀下に五年八月是月大三輪眞上田子人君卒、天皇聞之とある。（六落新選姓氏録考証）

参考

◎大神（大三輪）氏系図抄（奈良 三輪叢書）

建速素サ鳴命（紀伊国牟レ郡熊野大神）―大国主命―都美波八重事代主命―天事代クジ入彦命―

天日方奇日方命―飯方巢見命―建瓶尻命―豊御氣主命―大御氣主命―阿田賀田須命（宗像朝臣等の祖）

― 1 :
建飯賀田須命―大田々根子命―

大鴨積命（賀茂朝臣、鴨部祝、三歳祝、石部君等の祖）

― 2 :
― 3 :
― 4 :
― 5 :
― 6 : ミサ

― 武自古（掃武君祖） 五百鳥

田々彦命（大神直、神部直、神人直等の祖）
7 : コトイ サカウ フムヤ

― 特牛―逆―小ささぎ―文屋―利金―高市磨
― 8 : 9 : 10 : オビト

― 忍八―磐弓―大口―子首―鳥足
― 11 : 12 : 13 : マタオ

― 比義（宇佐八幡祠官の祖） 広目―清麿―吉成―全雄
― 14 : 15 : 16 :
― 良臣（豊後介）―庶幾―諸任（大神惟基）―

― 永藤

14 : は大田々根子を初代とする大三輪氏の代を示す。

以下、良臣まで大三輪（大神）氏について日本書紀等に記載されているものがたりは次のようである。

八代 忍八の兄逆（サカウ）

ある本には、物部弓削守屋大連、大三輪逆君、中臣磐余連が仏教を滅ぼそうと共謀し、寺塔を焼き仏像を捨てようとしたが、馬子宿禰が反対し、それをさせなかったという。

秋八月十五日（585年）、天皇は病が重くなり大殿で崩御された。このときもがりの宮を広瀬に建てた。馬子宿禰大臣は、刀を帯びて死者を慕うしのびごとを述べた。物部弓削守屋大連はあざ笑って、「獸を射る大きな矢で射られた雀のようだ」といって、こがらな身に、大きな太刀を帯びた馬子の不格好な姿を笑った。次に弓削守屋大連は手足を震わせわなないてしのびごとを読んだ。馬子宿禰大連は笑って、「鈴をつけたらおもしろい」といった。ここから二人の臣は、だんだん恨みを抱き合うようになった。三輪君逆は、隼人を使ってもがりの庭を警備させた。穴穂部皇子（欽明天皇の皇子）は、皇位をねらっていたので、声もあらわに、「なぜ生きている自分には仕えないで、死んだ王の弔いに仕えねばならぬのだ」と怒声を発した。（日本書記敏達天皇の巻）

夏五月（586年）、穴穂部皇子が炊屋姫皇后（敏達天皇の皇后、後の推古天皇）を犯そうとして、皇后が天皇のもがり屋におられるところへ押し入った。天皇の寵臣であった三輪逆が兵士を呼んで宮門をさしかためて、防いでいれなかった。穴穂部皇子はたづねた。「誰がここにいるのか」兵士は答えた。「三輪君逆がいます」と。七度も「門を開けよ」と呼んだが、逆はついに開けなかった。そこで穴穂部皇子は蘇我馬子と物部守屋に、「逆は甚だしく無礼である。もがりの宮でしのびごとを読み、「朝廷を荒さぬよう鏡の面のように清めおつかえし、私めがお守りします」という。これが無礼である。いま天皇の子弟は多く、両大臣もいるのだ。誰が自分勝手に私だけでお守りしますといえようか。また私のもがりの宮の内を見ようとしても、防いでいれてくれない。「門を開けよ」と七度も呼んだが答えない。許せぬ事だ、切り捨てたいと思う」と語った。

両大臣は、「仰せのままに」といった。穴穂部皇子はひそかに天下に王たらんことを企てて、口実を設けて逆君を殺そうという下心があった。ついに物部守屋大連と兵を率いて磐余の池辺を囲んだ。逆君は本拠の三輪山へ逃れた。この日の夜中にこっそりと山を出て、後宮（敏達天皇の皇后の宮）に隠れた。「海石瑠市宮（ツバキチノミヤ）である」逆の一族の白堤と横山が、逆君の居場所を明かした。穴穂部皇子は守屋大連を遣わしているのに、「ある本には、穴穂部皇子と泊瀬部皇子が計画して、守屋大連を遣わしたとある。」「おまえが行って、逆君とその二人の子を共に殺せ」と命じた。大連はついに兵を引き連れて行った。蘇我馬子宿禰はよそにいてこのことを聴き、皇子のところまいり、門の所で逢った。大連の所へいこうとしていたので、皇子を諫めて、「王者は刑を受けた人を近付けないともうします。みずからおいでになってはいけません。」といった。皇子は聞かないでかけた。馬子宿禰はやむなくついて行った。磐余に到り、しきりに諫めた。皇子は、諫めに従ってあきらめ、その場所でしょうぎに深く腰を下ろして、大連のしらせをまった。大連はしばらくしてやってきた。兵を率いてきて復命して、「逆らを斬って参りました」といった。「ある本には、穴穂部皇子が自ら赴き射殺したとある。」「馬子宿禰は驚き嘆いて、「天下は程なく乱れるだろう」といった。大連はこれ聞いて「おまえら小物にはわからぬことだ」といった。」「この三輪君逆は、敏達天皇が寵愛され、すべて内外のことを任せられた人であった。このため炊屋姫皇后と馬子宿禰はともに穴穂部皇子を恨むようになった。（日本書記用明天皇の巻）

参考

◎ 大神比義

七代の特牛の弟の比義は、豊後の宇佐の地に行って三年あまりの断食の修行の後、欽明天皇の三十二年（571年）八幡神を見たと言われる。（宇佐八幡由緒記）

九州の大神氏の一部（速見大神氏）は、この比義の子孫であると考えられるが、賀来氏はこの流れではない。

◎ 仏教の伝来と朝廷内での争い

欽明天皇の十三年（552年）に百済から仏像と経本が到来した。天皇は群臣を集めて仏を礼拝すべきかどうかを問うた。蘇我稲目は、西の国々は礼拝しております。日本だけが背くべきではないでしょうと答えた。

しかし、物部尾輿と中臣鎌子は強く反対した。天皇は、蘇我稲目にために礼拝させてみようかと裁断した。ところが、その後疫病が流行したため、天皇は、仏像を捨てて寺を焼いた。すると、にわかには天皇の大殿から出火した。この後仏教は着実に広がっていったらしいが、棄仏も続いた。仏教派は蘇我氏、廃仏派は物部氏であった。

この両氏の争いは、欽明、敏達の両天皇、蘇我稲目、馬子と物部尾輿、守屋の二代にわたり、皇位継承の問題も絡み、武力衝突も起こした。

敏達天皇の死後（585年）の「もがり」（埋葬までの間、遺体をもがりの宮に安置し、死者の霊を慰める儀式）は、皇位継承の争いのため、崇峻四年（591年）まで五年以上に及んだ。

穴穂部皇子は皇位継承の順位はかなり低かったが、皇位をねらった。また、崇仏、排仏で対立をしていた馬子と守屋の権力争いも加わり、武力衝突が起こった。用明元年（587年）用明天皇は崩御し、物部守屋は穴穂部皇子を皇位につけようと軍を起こした。蘇我馬子は炊屋姫を奉じ、穴穂部皇子を討った。さらに馬子は守屋を討つため、泊瀬部皇子（崇峻天皇）、竹田皇子、厩戸皇子（聖徳太子）などに呼掛け兵を起こし、激戦の末守屋を破り殺した。ここで、蘇我氏の独裁体制が確立し、崇仏派が勝利を治めた。同年八月崇峻天皇が即位したが蘇我馬子とうまくいかず崇峻五年（592年）馬子は天皇を暗殺した。

九代 磐弓の従兄弟小さざき

三月、采女を犯した者を取り調べて、みな処罰した。三輪君小さざきは取調べられたことを苦にして頸を刺して死んだ。（日本書記叙明天皇の巻）

十代 大口（オオクチ）のまた従兄弟文屋（フムヤ）

十一月一日、蘇我入鹿は、山背大兄王らを不意に斑鳩に襲わせた。山背大兄は馬の骨を取って寝殿に投げ入れた。そして妃や子弟らをつれて、隙を見て逃げだし生駒山に隠れた。三輪文屋君、舍人田目連らが従った。

入鹿らは斑鳩宮を焼き、灰の中に骨を見て、王は死んだものと思い、困みをといて退去した。山背大兄らは四日五日の間山に留まって食べるものもなかった。三輪文屋君は進みでて、「どうか深草の屯倉に行つてここから馬に乗り東国に赴き、上宮の乳部の民をもとに軍をおこし引き返して戦いましょう。そうすれば勝てるでしょう。」とお奨めした。大兄王は答えて、「おまえの云うようにしたら勝てるだろう。しかし自分は十年間、人民を労役に使うまいと心にきめている。自分の一事上のことがもとで、どうして万民に苦勞をかけることができようか。また人民が私についたために、戦いで自分の父母をなくしたと後世のひとに言われたくない。戦つて勝つたからといってますらおといえようか。己の身を捨てて国を固められたら、ますらおと言えるのではなからうか。」といわれた。

山背大兄らは山から出て、再び斑鳩寺へ入られた。兵らは寺を囲んだ。山背大兄は三輪文屋君を通じて將軍らにつげさせ「自分がもし軍を起こして入鹿を討てば、勝つことはまちがいない。しかし自分一身のために、人民を死傷させることを欲しない。だからわが身ひとつを入鹿にくれてやろう」といわれ子弟妃妾と共に自決してな
 くなられた。(日本書記皇極天皇の巻)

参考

◎ 天皇家の系譜抄

15 : 16 : 17 : 24 : 25 :

応神 | 仁徳 | 履中 | 市辺押磐皇子 | 仁賢 | 武烈

— 18 : — 23 :

反正 顯宗

— 19 :

允恭 | 木梨輕皇子

— 20 :

安康

— 21 : 22 :

雄略 | 清寧

26 : 27 : 28 : 29 : 30 : 31 : 32 : 33 : 34 : 35 : 36 : 37 : 38 : 39 : 40 :

継体 | 安閑

— 28 :

宣化 | 石姫 | 忍坂彦人大兄 | 叙明

— 30 : — 33 : — 36 : — 38 : — 40 :

— 29 : — 31 : — 34 : — 37 : — 39 :

欽 明 | 推古 (炊屋姫) | 竹田皇子 宝皇女 (皇極、斉明)

— 31 : — 36 :

— 32 : 孝徳

— 33 : 用明

蘇我稻目 | 堅塩媛 | 厩戸皇子 (聖徳太子) | 山背大兄

— 34 : 穴穂部間人

— 35 : 小姉君 | 穴穂部皇子

— 36 : 崇峻 (泊瀬部)

馬子 | 蝦夷 | 入鹿

— 37 : 馬子 | 蝦夷 | 入鹿

◎ 聖徳太子と蘇我入鹿

崇峻天皇の死後炊屋姫が即位し、推古女帝となったが、厩戸豊聰耳皇子（ウマヤドノトヨトミミノミコ）を皇太子に立てて政務を見させた。摂政の聖徳太子である。蘇我馬子も政治に関与した。太子の事績は述べるまでもないが、仏教国家への歩みを打ち出したほか、冠位十二階、十七条の憲法の制定、斑鳩寺の建立等を行った。太子の死は推古二十九年（621年）であった。

推古三十六年（628年）推古天皇がなくなった。天皇の死後半年が経ったが皇嗣がきまらず、後継者は、蘇我蝦夷が押す田村皇子と許勢臣（コセノオミ）らの押す山背大兄王とに分かれた。このときは蘇我蝦夷が兵を動かし大兄を押す者を討ち、田村皇子が叙明天皇となった。叙明天皇は在位十三年でなくなり、嫡子の中大兄は十六才だったため山背大兄王と古人大兄皇子との皇位争いとなり、叙明天皇の皇后であった宝皇女が即位し皇極天皇となった。

その後、蝦夷が病氣となりその子の入鹿が権力を握るが、山背大兄王とうまくいかず、皇極二年（643年）斑鳩に山背王を襲って殺した。

入鹿はその後も権力をふるったが、皇極四年（645年）六月十二日、中大兄皇子が中臣鎌足と図って大極殿で入鹿を討った。翌十三日、蝦夷も自刃した。大化の改新のはじまりである。

十代 大口（オオクチ）等

倭国においてひとに刀を盗まれたのは、その紀臣と次官三輪大口らの科である。（日本書記孝徳天皇の巻）

五月一日、小花下（上から十位の位）三輪君色夫らを新羅に遣わした。（日本書記孝徳天皇の巻）

孝徳天皇五年（649年）二月九日、長門の国から白雉が献上され、朝廷で盛大な儀式が執り行われ、雉を輿に乗せた三輪君瓶穗（ミカホ）らが御殿（難波長柄豊碕宮―大阪城の南付近）の前に進んだ。白雉と改元された（日本書記孝徳天皇の巻）

天智二年（663年）三月中軍の將軍として三輪君根麻呂らが新羅を討った。この年八月白村江において日本軍が唐の水軍に破れた。（日本書記天智天皇の巻）

参考

◎ 天皇家の系譜抄

34 :

38 :

叙明―天智―大田皇女

― 41 :

― 持統

― 39 :

― 弘文

― 49 :

― 50 :

― 施基皇子―光仁―恒武

—	—	43 :	44 :
—	元明——元正		
—		42 :	45 :
—	文武——聖武——孝謙——称徳	46 :	48 :
—	40 :	47 :	

天武——舍人親王——淳仁

◎ 有間皇子の事件と白村江（ハクスキノエ）の敗戦

皇極天皇は皇極四年（645年）に退位、中大兄の叔父の軽皇子（皇極帝の弟）が孝徳天皇となり、中大兄と鎌足（藤原氏の祖）が実権をにぎった。孝徳帝は、白雉五年十月難波宮でなくなった。

翌年（655年）、皇極天皇であった宝皇女が再び即位し、斉明天皇となった。六十二才であった。天皇は運河の開削等の土木工事を相次いで起こした。斉明四年（658年）有間皇子が謀反の疑いで処刑された。孝徳天皇の子で十九才であった。中大兄が仕組んだ陰謀に落ちたとされている。

斉明六年（660年）に唐、新羅と戦っていた百済から援軍の申し出があり、斉明帝は自ら博多に赴いたが朝倉で病死された。

中大兄が称制（即位式を挙げず天皇となること）して天智天皇となり（662年）、天智二年（663年）百済に二万七千の救援軍を送った。唐は百七十隻の軍船を朝鮮半島の錦江白村江に派遣し日本軍を待ち受けた。八月二十七日に両者は会戦し、日本軍は船を撃ち破られ大敗した。

天智八年（669年）十月中臣鎌足が没し、藤原の姓が与えられた。

十一代 子首（オビト）

大海人皇子（天武天皇）が近江の朝廷に対し挙兵をされたときに、伊勢の介三輪君子首が鈴鹿で出迎えた。（日本書記天武天皇の巻）

参考

◎ 壬申の乱

天智十年（671年）天智天皇が崩じた。天智天皇の皇太弟であった大海人皇子は不破の道（関ヶ原付近）を抑えるとともに、後の持統天皇や皇子をひきつれて吉野へ向い、天智天皇の子であった大友皇子（近江朝廷）に對して兵を挙げた。壬申の乱である。

その後、大海人皇子は、吉野を出発し（672年）、隱郡（ナバリノコウリ、三重県名張市）を経て鈴鹿山地を越えたところで迎えにでた伊勢の国司らと合流し、尾張の兵らを糾合して不破に入った。

一方、大伴連吹負（オオトモノムラジフケイ）が、大海人に呼応して大和で決起し、三輪君高市麻呂もたつた。三輪の高市麻呂（タケチマロ）は、箸墓付近の上ツ道で、南下してきた近江軍と戦い、武名を挙げた。

高市麻呂は領民にやさしく、日照りがつづき農民が苦しんだとき、自分の田の水を落として農民に感謝された。また、持統天皇が行幸されようとしたとき、今は農繁期だから中止されるよう直諫したが、いれられなかった。で、職を辞した。つねに、農民のことを考え、後に国司として長門国に赴任した際に、一月の寒気が身にしみる初瀬川（三輪川）のほとりで、送別の宴がもようされ、このとき歌った歌が万葉集に搭載されている。

三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずは吾忘れめや

（三輪山の神が帯にする初瀬川。その川の水がなくならない限り私はあなたを忘れることはない）

大海人皇子の軍は三つに分かれ進撃し、大友皇子の軍を撃破した。大友皇子は自害して果てた。

大海人皇子は即位して天武天皇となった（673年）。

天皇は、官僚、行政の組織化につとめるとともに、古事記や日本書紀の編さんを命じた。

◎ 古事記と日本書紀

古事記は稗田阿礼が口述し、太安万呂が記録して和銅五年（712年）に完成したもので、帝紀、旧辞をもとに神代から推古天皇までが記述されている。全三巻である。日本書紀は、舎人親王によって養老四年（720年）に完成したもので、神代から持統朝までを内容とする最古の勅撰歴史書であり、全三十巻である。

十四代 良臣（ヨシオミ）

光孝天皇仁和二年（886年）に外従五位下前の肥前介大神朝臣良臣が豊後介に遷任された。三年三月特に従五位下を授けられた。五年二月任期が満ちて職を去ろうとしたときに、百姓らが留任を希望したので再任された。（豊後国志）

仁和二年二月に外従五位下行肥前介大神朝臣良臣が豊後介に任命された。豊後介外従五位下大神朝臣良臣に従五位が授けられた。これより以前に良臣は官に向って訴えていた。すなわち、浄御原天皇（天武）が壬申の年に伊勢に入られた時、良臣の高祖父の三輪の君子首（オビト）は伊勢介であったが、天皇軍に従って功績があり。なくなつて後ちに、内小紫位を贈られた。古の小紫位は従三位に准ずる位であるので、子首の子孫は外位に叙されるのはおかしいと。そこで外記に下して考実させた。外記はいう。贈従三位大神朝臣高市麻呂、従四位上安麻呂、正五位上狛麻呂兄弟三人の後は、皆内位に叙せられており、大神引田（ヒキタ）朝臣、大神田朝臣、大神掃石（ハキシ）朝臣、大神真神田（マカミタ）朝臣等は遠祖は同じであるが、派別各異なっており内位に叙す理由がない。加えて神亀五年以降諸氏は先づ外位に叙し、後ち内位に預かっている。良臣の姓は大神の真神田朝臣である。子首の後、全雄（マタオ）に至るまで五位に預かる者はない。今内品に叙せられたいというのはもつともであると、良臣及び故兄全雄の外位をとりやめて、特に内階を賜った（三代実録）

七 推理―神代時代の大神氏

崇神天皇は「ハツクニシラススメラミコト」とおく 本美典教授の説に注目したい。
り名されているように崇神王朝（三輪王朝）を創設した天皇であるときられている。では、大和地方のそれまで王朝はどのようであったのであろうか。学説はいろいろに別れているが、ここでは、産業能率大学の安先生は、数理統計を使って、斬新な説を日本の古代

① 古事記と日本書紀の記述は考古学的にみても、相当信頼できる。
② しかし、天皇の在位年数は、常識的にいって長すぎるので、天皇の代数のみをとって、統計的に求めたところの平均的在位年数（平均約十年となる）で推定すると、神武天皇は、西暦二百八十年から二百九十年ころの在位となる。

③ 邪馬台国の卑弥子（ヒミコ）は西暦二百三十八年頃の在位であるから、古事記の天照大御神（アマテラスオオミカミ）に重なる。

④ 天照大御神には須佐之男（スサノオノミコト）という弟がおり、卑弥子にも弟がいた。
また、高木神（タカギノカミ）という神が、天照大御神と一緒に統治していたが、卑弥子にもその言葉を伝える男がいた。

⑤ 神武天皇は九州から大和地方に東征したとされている。
⑥ 古事記の高天の原（タカマノハラ）の天の安の河は、福岡県朝倉郡夜須町の夜須川（ヤスカワ）であると思われる。

⑦ この夜須町の周りの地名とその方角の順序とが大和地方のそれと一致する。
北九州 北の笠置山から逆時計周りに

笠置山―春日―三笠山―住吉（墨江） 神社―平群（ヘグリ）―池田―三井―小田―三輪―雲堤（ウナデ）
―筑前高田―長谷山―加美（上）―朝倉―久留米―三瀨―香山（高山）―鷹取山―天瀬（アマガセ）―
―玖珠（クス）―鳥屋山―上山田―山田市―田原―笠置山
畿内 北の笠置山から逆時計周りに

笠置山―春日―三笠山―住吉（墨江） 神社―平群（ヘグリ）―池田―三井―織田―三輪―雲梯
―大和高田―長谷山―賀美（上）―朝倉―久米―水間―天の香山（高山）―高取山―天瀬（アマガセ）―
―国巢（クズ）―鳥見山―上山田―山田―田原―笠置山
⑧ 地名の集団的な類似は、その付近に居住していた人々が集団で移動したために生じたと考えるのが妥当である。

⑨ 邪馬台国の卑弥子の宮殿は、この夜須町、甘木市、朝倉町に存在したと思われる、大和に邪馬台国が東遷し、最初の大和王朝となった。

以上の説を下敷にして、更に、この九州の安川のほとりの三輪町にも三輪明神大己貴（オオムナチ）神社があり、この神社も大神山を御神体としていること、また、大神氏の祖先是、須佐之男命となっていることなどから大胆に推理すると

大神氏の祖先是、邪馬台国で祭祀をしていたが、邪馬台国の東遷（古事記では神武天皇の御東征）とともに、大和に移り、大和王朝が崇神王朝にとって変わったときに、呼び出されて再び前王朝の祭祀を続けることとなったのではなからうか。

この推理を記してこの書の結びとしたい。

参考図書

古事記

日本書紀

続日本記

三代実録

旧事記

弘安凶田帳

平家物語

源平盛衰記

太平記

大神姓系譜

妙見宮縁起

三輪叢書

築上郡誌

宇佐八幡縁起

源平の雄緒方惟義

大分県の歴史

福岡県の歴史

新選姓氏録

築上教育誌会編算

渡辺澄夫著

渡辺澄夫著

平野邦雄ほか著

賀来惟達著

孔版